

アダム・スミス『国富論』初版本 (1776年刊)の購入に寄せて

－ この初版にひそむ一つの秘話とわが国における
草創期の彼の受容過程について・断篇 －

金子 光男*

出版地 LONDON

出版者 W. Strahan and T. Cadell

出版年 MDCCLXXVI

第1巻 ページ, i タイトル, ii 道徳感情論第4版広告, iii-xi 目次,
xii 白紙, 12-510 本文, 511-512 白紙

第2巻 ページ, i ハーフタイトル, iii タイトル, iv 正誤表,
12-587 本文, 588 広告

1 『国富論』秘話

本学図書館は、3年ほど前、スミス(1723-1790)『国富論』初版本¹をかなりの高額をはたいて、雄松堂より手にいれた。正確な購入額は聞いていないが、書肆の売価は600万円ほどと記憶しているから、若干の値引き

*かねこ・みつお / 政治経済学部教授 / 経済思想史

¹ 明治大学図書館所蔵資料の請求記号・091.3/851//H

はあっても、その金額から推して、本書の稀覯書としての価値は、現在、益々高まっているものと推察される。しかし、わが国の歴史ある大学の多くが、すでに本書を蔵していることを思えば、遅きに失した決断であったとはいえ、本学にとって、これは決して無駄な出費ではなかったであろう。

さて、本学には、購入した貴重書について、その推薦者が一文を草する決まりがあるらしいことを、迂闊にもこれまで知らなかった。それを承知していれば、ウカウカと、という思いが横切らぬわけでもないが、ともあれ以下では、この初版本に絡むあるエピソードを紹介して、今日まで日延べにしてきた、本書購入の推薦者としてのわが責をはたすことにしよう。

ところで、本学がこのたび購入した『国富論』が信頼しうる書肆によって持ちこまれたものであってみれば、これが1776年3月9日、ロンドンで500部(一説には1000部)ほど刷られた、1セット2巻本からなる真正の初版本(価格は1セット1ポンド16シリングであり、水田洋氏によれば、当時の平均的労働者の20日分の日当に相当する高額であった)の一部であることは間違いなからう。と、私がここで、態々、思わせぶりなことを言うのも、出版地、出版者、出版年を同一としながら、「頁数その他に違いがみられる」初版本と、それとは別に第2巻のタイトル頁およびその奥書を異にする、いわゆる「エディンバラ版」と称する、少なくとも2種類の初版本のあることが、守矢洋氏によって報告されているからである(「A. スミス『国富論』初版の二つの異本について」(1973年)『経済学雑誌』69巻5号所収)。

たしかに、ことをわが国に限っても、氏以前に、本書に関するかなり詳細な書誌的考察がいくつかなされてきてはいる。たとえば、1942年に、三辺清一郎が『国富論』の「初版が公にされた1776年に、すでにこれと同じ出版年紀(すなわち1776年)を持つ不正版が、利に敏い出版書肆によってダブリンから出版された」経緯を述べている。しかしこれは、20名の出版者の名を連ね、しかも八折版3巻からなるものというから、ただちに偽版と分かる代物であった。ゆえに、守矢氏の言われるように、「『国富論』の初版(ロンドン版)が2種(またはそれ以上)存在することを記した」論文はこれまででなかったようである。

ここでは、紙幅の都合でその一種類の異本についてふれるにとどめよ

う。それは現在、福田徳三文庫として大阪市立大学に所蔵されている初版本2セットのうちの一つである。この異本は正本とどう違うのか。これを手づから取り上げ見分された守矢氏によれば、まずタイトル頁はまったく同一であるものの、目次の組み方がまるで違う。正本では上記のように第1巻にまとめて掲載された目次が、異本では第1巻に1編～3編、第2巻に4、5編というように分載されているからである。

実は、この目次づけは『国富論』第2版(本学所蔵)と同一のものである。しかもこの第2版と異本の同一性はそれのみにとどまらない。キャンランが明らかにしたように、スミスは1778年第2版を刊行するに際して、この2年間のうちに、初版に対してかなりの変更および訂正を施し、ゆえに頁の移動も生じ、第1巻は両版とも510頁であるが、第2巻は589頁(初版では587頁)となった。異本の本文は、この第2版の頁数と同一であると共に、本文内容もまた、初版に訂正を加えられた文章とこれまた同一のものとなっている。

第2版の本文と同一の組版をなす異本初版本は、しかし本文頁にいたるまでの頁の組方は、目次を除いては、初版正本と同一の体裁を保とうとするかのごとくである。すなわち、出版年はMDCCLXXVI(因みに第2版は、MDCCLXXVIII)の記載であること他に、第1巻のタイトル頁の次頁に『道徳感情論』の広告がはさまれ、次いで第1巻分の目次が配される。そして、第2巻ではタイトル頁の次に、これまた正本同様に、正誤表 errata をもち、次いで第2巻の目次がくるのに対して、第2版にはこの errata はない。しかしここにははさまれた正誤表は、初版第2巻のP. 467, 488の2箇所語句に関わるものであり、正本にはもちろん該当語句はあるものの、異本ではそのいずれもが2頁後のP. 469, 490にずれてしまい、正誤表それ自体が無意味となってしまった。

こうして守矢氏は、この異本版を福田徳三も指摘していた第1版の重刷の可能性を検討しつつ、しかし結論として、本書を「第2版の目次+本文に... 初版の目次以前(目次を含まず)のページを付け加えて製本した第2版の偽本」(傍点筆者)とされたのである。

当異本版が誰によって何部作成されたかは全く不明である。が、いずれにしても、「第2版以降の諸版の場合と同じくストラーンは、初版も500

部印刷することが認められていた」(W.B. トッド、K.E. カーペンス)との文言を信ずるとすれば、500部ほど刷られた第2版の何部かが、上記のような手の込んだ作業を経て『国富論』初版として生まれ変わり、その一部が福田の手に落ちた。かくて、初版が「少なくとも2種(またはそれ以上)存在すること」が守矢氏によって、世界にさきがけて明らかにされたわけである。これによっても、われわれは、わが国におけるスミス研究の広がりや深さに思いをいたさざるを得ないものがあるだろう。それ以上に、わが興味を浚うのは、ようやく確立しつつある市民社会に明るい未来をさし示した『国富論』が、他方で人の心を惑わし、怪しげな所業に向かわせる魔性を秘めていたということである。もとよりこれは、スミスの全く与り知らぬことではあった。しかし歴史の風雪に耐えうる超一級の作品には、芸術作品も含めて、こうした秘話を生み出す宿命を負わされているものなのであるのか。あるいは、それこそが、また、人類の遺産ともなるべき作品の証しであろうか。

2 『国富論』翻訳事業

上に、筆者はわが国におけるスミス研究の広さと深みについて一言した。わが国では、それほどにスミスへの愛着が強いともいえよう。もとよりそれは、スミスが「経済学の父」たるにとどまらず、倫理学、哲学をも包含する社会科学の基盤を用意した、彼の思想の奥深さによるものであったろう。このスミスをわれらの先人たちはどう受容れ、根付かせてきたのか。以下では、そうした草創期のありようを簡単に記して、この小論を閉じることにしたい。

『国富論』(1863年マカロック版)が「開成所」(1863-1868)に所蔵されていたということであるから、本書はすでに幕末期には西周(1829-1897)、津田真道(1829-1902)によって持ち込まれたものであったのかもしれない。彼ら両名は1863年から2年間、幕府からライデン大学(オランダ)に留学し、帰朝後、開成所教授職についたが、この経歴からするに、この両名は、「わが国で初めて正式に外人教師について経済学の講義を受けた」(三辺清一郎「翻訳『国富論』—国富論書誌続篇—」『三田学会雑誌』1943年9月

89 頁)人となったわけである。しかしその後の彼らの歩みをたどれば、彼らが特に経済学に関心をもったとは思えず、わずかに津田がライデン時代に「経済学に関する講義ノート」を作っていたにすぎない(三辺、同所)。

わが国ではじめて経済学を講述し、世に広めていくのは、福沢諭吉(1834-1901)である。福沢にとって、新生日本の現下の目的は、まず「国の独立」であり、それを果たしうる手段が「文明」であった。そして、その担い手となるものは、経済的にも、精神的にも「一身独立」した気概と「学問」を修めた「ミッドルクラス」の人々である。そのような人士の多くを育成するため、彼は慶應義塾において、特に経済学やまたその基礎をなす倫理学の講義、あるいは広汎なる出版啓蒙活動に挺身し、かくて「民間にあって日本文明の教師」(小泉信三)としてその身を全うしたのである。

青年期、緒方塾において医学、自然科学に関わる蘭学書を学んだ福沢は、そのことによって事象の因果的法則的なものの見方を修得していった。彼の儒家に対する痛烈な批判もそこに発するが、ともあれ彼のこうした素養は、社会的現象においてもこれに類する法則のあることをよく理解させたであろう。有名な「コンペチション」に「競争」という訳語を造形し、商人間の自由な競争の結果、価格、金利もおのずと決定されるという「商売世界の大本」を見出しえたのである。ただ、その場合の彼の経済学的知識は、主として「経済学史上重要な地位を占める」わけではないウェーラント、チェンバースといった人々の啓蒙書によったものであるらしい(三辺、小泉参照)。しかしそれでも福沢は、「アダム・スミス」こそが「富有の源」を知恵の限りを尽くして考究し、「分業の効用」を明らかにして、「始て経済の定則を論じ商業の法を一変」したのである、とスミスの功績を高く評価し、良く彼の本体に迫りえたのである。こうして福沢は経済学的重要性とその父たるスミスの意義を広く国民に知らしめたが、ここでこそ「文明の教師」福沢の真骨頂が発揮されたのであった。

たしかに彼は、周知のように、当時のわが国民の文明度、成熟度にかんがみ、重商主義的な国家干渉を認め、スミスの自由主義による経済政策を首尾一貫して主張したわけではなかった。しかし、彼の経済的社会観の基調は、国民の自立心を涵養し、それに信頼を置いた自由主義的思想であったと見てよからう。それゆえ、『国富論』の本邦初訳が、そうした福

沢の薫陶を受けた学徒の一人によって手がけられたのも、単なる偶然のこととは思えない。その人物とは、石川映作(1858-1886)である。彼は明治8年7月慶應に入塾し、尺振八²(1839-1886)に英書を学んだ後、田口卯吉(1855-1905)の主催する東京経済学講習会に参画、明治15年同会出版委員となった。なお、当会は、維新後、民業の創始と復興に身命を賭した渋沢栄一(1840-1931)の後援をえていたことにも留意しよう。そして、この同じ年の4月、田口は「会員の翻訳せられ足る書を冊子に編輯し、講義録(すなわち、『東京経済学講習会講義録』-引用者)と題して毎月1号ずつ発行」することを決意し、まず『富国論』をとりあげた。かくてここに『富国論原名「ウェルス、オフ、ネーションス」英国 アダムスミス氏著 日本尺振八 日本 石川映作譯」が順次刊行されることになるのである。

石川の訳業の刊行は翌年の12月まで続いて、都合21巻の掲載をみた。しかしこれは、内容的には『富国論』の1編7章までにすぎず、その後彼は、さらに18年中ごろまで翻訳を続行し、第4編を仕上げたものの、彼自身による『富国論』の完訳はついになかなかつた。というのも、肺患により、彼は斃れたからである(明治19年4月)。

この時期、田口は他方で、石川を中心とする数名の委員を督促して『ペニー・サイクロペディア』を翻訳させ、『泰西政治類点』(24冊)の刊行を企図し、これを明治17年に完了させている。僅かに、3年間の「突貫工事」であった。だから石川のこの死は、田口をして、「石川君を弔う辞」において、無理を強いたと懺悔させるのである(杉原四郎)。かくて、石川の訳業を継いだのは嵯峨正作である。彼は第5編「公債論」を明治21年に完成させている。

先の『講義録』は、21巻をもって廃刊になった、と三辺は推測する。この連載分と、その後に残された両者の訳業が、いかなる経過をへて本邦初訳の『富国論』全3巻(明治17-21年4月)として刊行されたかは、どうも明らかではないようだ。が、いずれにせよ、われわれはもう少し、三辺の叙述をたどることにしよう。講習会は、当初、『富国論』を講義録に掲載後、各200頁の分冊を13冊(実際は12冊)刊行することとし、明治17年1月よりこれに着手した。そして、同年6月に第1-4冊分を合本して『英

²せき・しんばち。文久期に仏・英に遊学し、中浜万次郎に英語を学び通訳として活躍。明治3年に英語塾「共立学舎」を創立。

国 亜當斯密氏著 日本 尺振八先生閱 同石川映作譯 富国論 第一巻』を刊行し、次いで、第 5-8 冊までの合本を『英国 アダムスミス氏著 日本 石川映作譯 富国論 第二巻』として同 18 年 5 月に刊行する。さらに第 9 分冊は同 18 年 9 月、10(同 19 年 11 月)、11(同 20 年 6 月)、12(同 21 年 4 月)の分冊がそれぞれ刊行された後、これらを同 21 年 4 月に合綴して、『英国 アダムスミス著 日本石川映作、嵯峨正作分譯 富国論 第三巻』が刊行され、ここに本邦初訳の『富国論』の完成をみる事ができた。

3 スミスの実践者・田口卯吉

さらに田口は、第 2 巻の刊行直後、すなわち明治 18 年 6 月に、国富論中の 4 編だけを抜粋した『富国論覽要』(上)(下巻は同 19 年 12 月)を発行している。それに寄せた緒言によって、彼の意図は明らかである。つまり、本書全巻は「鴻漸」であり、また「購読二不便ナル」ため、読者は「此篇ヲ熟読翫味スルニ於イテハ全書ヲ通読セザルモ以テ保護政策ノ非ヲ悟リテ自由交易ノ社会ニ大利アルヲ知ル」ことができるからである。ここに、福沢以上に自由主義を貫き、「日本のスミス」とも称された田口の信条および彼のスミス観、すなわち、スミスの理論よりも、むしろその自由主義的政策や実践性に傾倒した彼のスミス理解が、よく現されている。また、かかる先進的思想を国内に普及させようとする彼の流儀は、福沢が多くは「教師」として、人々の教育を通じてその目的を達しようとしたのに対して、田口は事業としての翻訳出版を介して事にあたったという点で、学者、批評家の枠をこえて、実業人、政治家として活路を開いた、彼らしいやり方であった。

一般的に、一国のある時代の支配的経済学は、概ね自国の経済状況に規定されたものとなっている。ゆえに、その経済学の意義や限界、あるいは学説史的な流れを理解しようとするれば、そうした経済学を成り立たせている経済史的研究もまた、必須の予備作業とならざるを得ない。しかし、維新直後のわが国の場合、すでに完成された多様な経済学が、その基礎過程から全く切断された形でヨーロッパからもちこまれ、それぞれが「翻訳・輸入経済学」として無批判に受容されることになった。

田口の場合もそうした弊がなかったかどうか。彼にとっては、各人の利己心と分業に基づく自由な経済活動、すなわち、国家的特権と干渉を是認する重商主義の否定こそが、国内の経済発展を保証し、さらに、そのような自由主義的な諸国間の自由貿易が世界の繁栄と平和をもたらす。これはまた、彼にあっては、無条件にいつの時代の、どの国にも妥当する世界観として受け止められた。たしかにこの主張は、ある政治経済状況においては、それなりの真理性を持ち、それゆえ破壊的な批判力ともなりえた。たとえば、明治 14 年前後の海運業は、政府の特権の保護を得ていた三菱によって牛耳られ、他の追従を許さなかった。しかし明治 14 年の政変後、大隈の失脚と共に三菱は政治的バックを失い、くわえて田口らの特権排除の激しい批判が海運業の隆盛をまずは近海航路に及ぼし、さらに海運業全般の活路を開き、やがてそれは遠海航路をきり開く原動力ともなるのであった。

しかし、明治政府の富国強兵を目ざした様々な政策の実施により、わが国もようやく資本主義的経済体制をより確かなものにしていくにつれ、対外的には国内産業の保護政策も必然となり(ここに、自由主義を貫きえない福沢の悩みもあった)、あるいは資本対労働の問題も発生せざるをえないことになる。かくて、ドイツから輸入された歴史派経済学が台頭し、それに基づく「社会政策学会」(1900 年)の設立もみられる。田口らの自由主義思想は、こうした陣営からの、特に労働者の保護政策をめぐる容赦ない批判をあび、この批判に抗しえぬ彼らはついにその死命を制せられたのである。

わが国がスミスを受け入れた最初の過程は、以上のように実践的な意味合いの強いものであった。そこでは、スミス経済学によってたつ前提を欠き、それゆえ彼の奥深さはかえって捉えられぬままとなった。しかし、われわれは上に見た先人の偉業に感謝しこそすれ、その仕事を責めることは出来ない。先人たちの、文字通り、命を賭した大業のゆえをもって、まずは実業界が大いに鍛えられ、その後のわが国のスミス研究もまた、世界でも稀にみる広がりや深みと水準に達しえたからである。

追記：筆者は本稿を草するに当り、わが同僚高橋信勝専任講師の手を煩わし、20 本を超える文献コピーを頂戴した。記して謝意を表したい。